

■タイトル■

メキシコの看護教育における社会奉仕実習③

■著者■

群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

■リード■

メキシコでは医師や看護師などの専門職教育において、卒業前の一定期間、「社会奉仕実習」として、地域あるいは民間の施設で保健医療業務に従事することが義務づけられている（本誌第1巻10号と第2巻3号紹介）。今回は、「組織で機能するための能力の養成」について、日本の現状にも触れながら、メキシコの取り組みを紹介する。

■本文■

社会人としての基礎力への期待

メキシコで1年間の社会奉仕実習を終えた実習生のなかからは、「施設と地域との連携を自分が主体的に引き受けることで、交渉や依頼をする際の具体的な方法がわかった」という声を聞くことがある。また、配置先での葛藤・和解を通して「これまでの自分には想像もつかなかった、相手の状況や立場を理解することの必要性に気がついた」とも述べる。

社会奉仕実習では、配置先の問題の把握から活動計画の立案、実践までの責任をすべて実習生自身が負う。そのため、通常の臨地実習に比べて活動の自由度が高い分、それまでに経験したことのない学習や気づきが得られるようである。

一方、わが国では90年代後半から若年者の早期離職問題が表面化し、以来、「社会人としての基礎的な力を学生時代に培ってこなかった」という反省に基づき、複数の大学が社会人基礎力*1を育成する授業などのモデル授業を実施している。新人の早期離職が深刻化している看護職においても、組織で働くためのコアスキルとして、「自己認識力」「思考力」「対人力」という重要な三つの基礎力があげられている。

看護専門職者が組織で機能するための能力の養成

わが国の大学教育においては近年、看護学科と他学科の学生が実習を通して連携的に学ぶ取り組みが複数の施設で取り入れられるようになり、保健医療チームの一員として十分に機能できる能力の育成が重要な学習課題となりつつある。社会全般にモラルの低下がみられるなど、人々の共生の意識が揺らぎつつある今日、対象者の生活に密着し、さまざまな人々の連携や協働に主体的な役割を果たしうる看護職への期待は、今後より高まると予測される。しかし、看護基礎教育カリキュラムの内容は、高度化・複雑化する医療の要請を受けて過密さを増しており、期待されている知識や技術の統合力・応用力のみならず、組織のなかで機能するのに必要な能力の養成を基礎教育課程に期待するのは、かなり難し

いと考えられる現状だ。

主に国内の医療格差を是正する目的で、義務として組織の一員に組み込まれるメキシコの社会奉仕実習を、筆者は組織や社会での実践力を養う教育機会という観点から着目している。専門職業人としての成長と地域貢献という両者を満たすためのメキシコの取り組みが、組織で機能できる能力を備えた看護職者の養成にどのような示唆を提供しうるのか、その追究は始まったばかりである。

*1 経済産業省によれば、「様々な人々と一緒に仕事をする上で必要な基礎能力」とされ、前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）に大別される。

■引用参考文献■

1)北浦暁子ほか.看護師のためのビジネススキル.医学書院,2007.



女性自立支援施設での育児指導